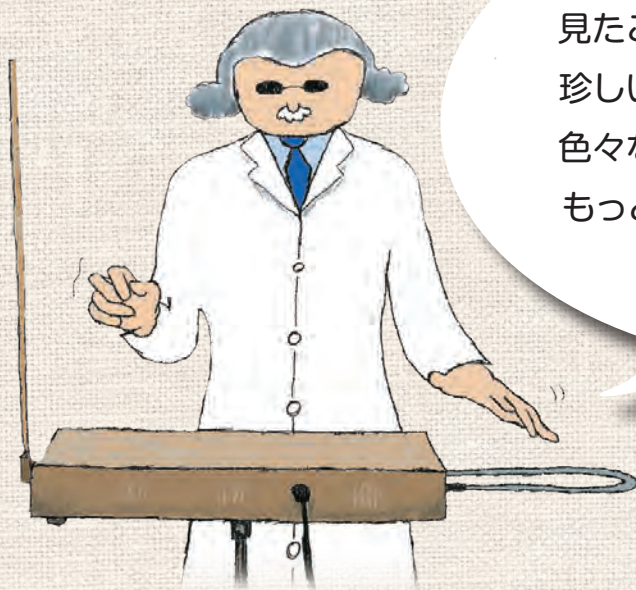




クラシックって楽しいな!

(珍楽器にまつわるエトセトラ)



世界には君たちが
見たことも聞いたこともないような
珍しい楽器がたくさんあるんじゃ。
色々な楽器のことを知って聴くと、
もっとクラシック音楽を楽しむことが
できるんじゃあぁあ〜♪

 公益社団法人国際音楽交流協会

〒602-0894 京都市上京区上御霊仲町457-10
TEL: 075-414-1311 URL: <http://www.imea.or.jp>



このパンフレットは、**宝くじ**[★]の社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

宝くじは、みんなの暮らしに役立っています。



宝くじは、図書館や動物園、学校や公園の整備をはじめ、災害に強い街づくりまで、みんなの暮らしに役立っています。

人と楽器のつながり

世 界には約350種類の楽器があると言われるが、この内、一般的に良く知られている楽器は100にも満たないのではないだろうか。クラシック音楽で良く使われる楽器は、ピアノ、チェンバロ、パイプオルガン、ヴァイオリン、チェロ、ヴィオラ、コントラバス、ハープ、フルート、クラリネット、サクソフォン、ファゴット、トランペット、トロンボーン、ホルン、ティンパニ、スネアドラム、カスタネット、ウッドブロック、シンバル、マリンバ、トライアングル、鉄琴、木琴、タンバリン等がある。その他簡単に思いつくのはギター、ベース、ドラム、ウッドベース、リコーダー等々があり、それらから派生した電子楽器を含めてもやはり100には及ばない。世の中には我々の知らない数多くの珍しい楽器が存在していると言える。



楽 器は一般的に大きく三分類されるが、その発展の歴史から打楽器は鼓動と、管楽器は呼吸と、そして弦楽器は精神と関わりが強いとされる。楽器は我々人類と切っても切れない関係にあるのではないだろうか。

最 初の打楽器は人間の身体そのものであったと言われている。原始時代、大地を踏み鳴らしたり、両手を叩いたりから始まり、その後リズムを強調するために木や石、動物の骨などを打ち鳴らすことにつながっていった。これが打楽器の始まりと言われる。

管 楽器の歴史もやはり古く、骨、角、石、草木、粘土など様々な素材を用いて製作された。日本でも縄文時代の遺跡から土笛が多数見つかるほどである。動物の角は丈夫で軽く、内部が空洞なので、先端に穴を開けて吹くとそのまま楽器になった。狩りによって生活の糧を得ていた狩猟民族は、角を吹き鳴らす事で仲間に合図を送ったり、また獲物をおびき寄せる道具として使ったりしていた。

弦 楽器は一説には狩猟用の弓からヒントを得たと言われている。弦に様々な刺激を与えて得られる音を共鳴体によって増幅させる構造になっている。打楽器や管楽器と比較して後発であり、当初より意図的に音の高低を作る事が考慮されていたという点で打楽器や管楽器と一線を画す。癒しの音をもつハープは紀元前3000年のエジプトの壁画などにも描かれている。

珍 楽器」に関しては各楽器の生まれた経緯や歴史的背景がバラバラなのでひとくくりで語れない。例えば電子楽器を例に挙げると、19世紀終わりに人々の生活の中にじわじわと電気が入り込んできたことが誕生のきっかけだったと言える。第二次世界大戦後には科学技術の進歩に伴い電子楽器も飛躍的に進化した。また、後述するチャルメラのように、葦笛からオーボエに至る進化の過程で生まれた珍楽器もある。更には、当時の作曲家や演奏家達が新しい音を求めた結果製作された楽器もある。一方で、中には音楽と全く関係のないところで偶然生まれたものもある。世界初の電子楽器であるテルミンは、ロシアの物理学者レフ・テルミン博士によって発明された。当時ガス誘電率の研究を行っていた博士は、ガスにかかる圧力や温度の違いによって計器から出る音高が変化することに気づいたが、これがテルミン誕生のきっかけとなった。レーニンやアインシュタインもテルミンの魅力にとりつかれたと言われる。「珍楽器」と接する時、形状や音色、演奏方法と併せて誕生時の歴史的背景や秘話を知るとはとても面白い。



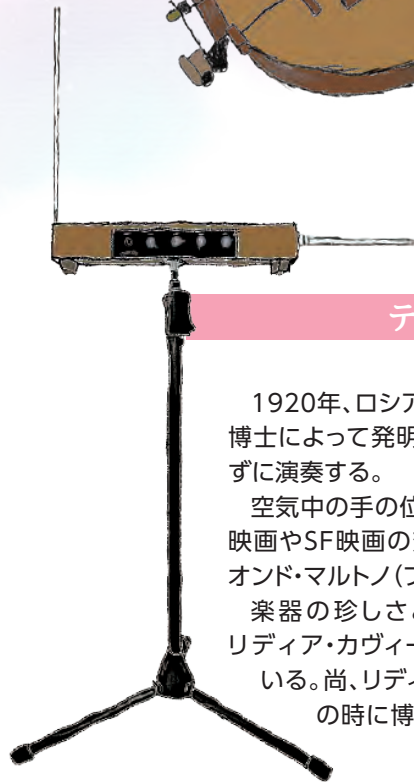
楽器には音楽家の情熱や人類の英知が結集されており、楽器発達の歴史を人類発達の歴史と重ねるとはとても興味深い。



ハーディーガーディ

11世紀以前に発生したと考えられる中世ヨーロッパの民族楽器。10～13世紀には教会音楽に用いられたが、全長が1.6メートル前後あり二人が膝に乗せてハンドル操作と鍵盤操作とを分担していた。その後、小型化され一人で演奏できるようになり世俗音楽にも用いられるようになった。

リュート型の共鳴胴で右にあるハンドルを回すと弦をこすって音が出る。左手で鍵盤楽器的にピッチを変える。教会や上流社会では15世紀頃から「悪魔の楽器」「乞食の楽器」などと呼んで蔑視された時期もあった。



テルミン

1920年、ロシアの発明家、レフ・セルゲーエヴィチ・テルミン博士によって発明された世界初の電子楽器で、直接手を触れずに演奏する。

空気中の手の位置によってピッチと音量を調節する。ホラー映画やSF映画の効果音としても使われる。類似楽器として、オンド・マルトノ(フランス人の電気技師によって発明)がある。

楽器の珍しさと相まって専門の演奏家も数少ないが、リディア・カヴィーナは第一線で精力的に演奏活動を行っている。尚、リディアはテルミン博士の遠い親戚にあたり9歳の時に博士より直々に演奏法を学んだ。

YouTube

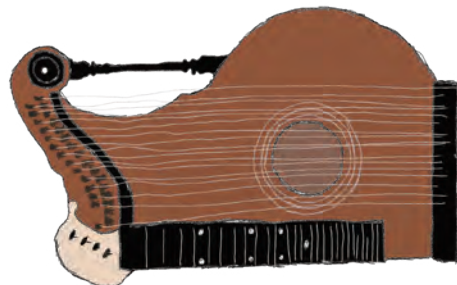


リディア・カヴィーナ

チター

エビスビールのCMでお馴染み、映画「第三の男」のテーマ曲で使用されている楽器。進化のルーツには諸説あるが、ドイツ南部のバイエルン地方、オーストリア、スイスのチロル地方の民族楽器であるというのが通説。30本の伴奏用弦と5、6本の旋律用弦が張られているものが一般的と考えられるが、表現力を高めるためにより多くの弦が使用されているものもある。但し、この場合、更に高度な演奏技術が要求される。親指につけたプレクトラムと呼ばれる爪を使って弾く。チターに似た楽器は世界中に発達していて、日本の「箏」もチターの仲間。無理な手指の動きで奏法が難しく、腱鞘炎になってしまう人も多い。

ワルツやポルカなどの民謡はもとより、バロックやルネサンス期のクラシックから現代音楽、ジャズ・ポップスまで多岐にわたっている。モーツァルトもチターの作品を書いている。

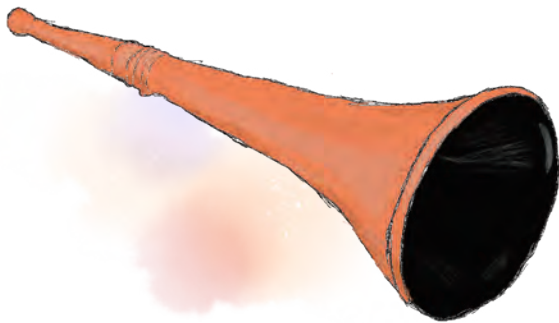


ニッケルハルパ



スウェーデンのウップランド地方に伝わる伝統楽器。ニッケル=鍵盤、ハルパ=弦楽器を意味し、その名の通り鍵盤のついた弦楽器である。音色はヴァイオリンに似ているが、共鳴弦が12本と多いため、教会で聞いている様な深みのある音で残響感がある。14世紀頃の教会のレリーフにニッケルハルパを持つ天使が描かれているのでその歴史は古い。その後一度廃れた後、20世紀終わりになって再び愛好家が増え、現在では多くの奏者が演奏している。以前、スウェーデンのお札(50クローナ紙幣)にも描かれていた。工芸品であるため職人が一つずつ手作りするので、スウェーデン国外にはあまり出回っていない。

珍楽器紹介



ブブゼラ

2010年、南アフリカで開催されたサッカーワールドカップがきっかけで日本でも有名になった。

130デシベルを超える大音量(ガード下の電車の騒音でも100デシベル程度)を発するので、競技中にならされた場合、審判のホイッスルが聞こえないなどの弊害が出ることもある。

サンバホイッスル

サンバ、特にリオのカーニバルなどで使われる十字型の小さな笛。

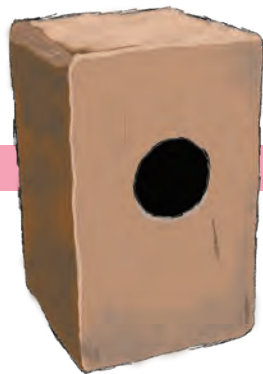
サンバの発祥地ブラジルではアピートと呼ばれる。元々は鳥をおびき寄せるための「呼び笛」であった。



カホン

スペイン語で「箱」という意味を持つペルー発祥の楽器。かつて奴隷としてアフリカから連れてこられた人たちが、ただの木箱を楽器の様に叩いていた事その起源と言われている。元々はラテンミュージックで使用されていたが1970年代にフラメンコ伴奏にも使われる様になった。

一見、高さ40~50センチ程のただの木箱。ここに座って両手でたたく。コンパクトで電源が不要なので、ストリートライブなどでドラムの代わりに使われる事も多い。



スライド/ホイッスル

注射器の針の部分に吹き口がついた様な構造を持つ笛。息を吹きながらスライドさせ、グリッサンド奏法により演奏される。オーケストラでは打楽器奏者が担当することが多い。グリッサンドとは、一音一音を切らないで、流れるように音程を上下させる技法のこと。



オカリナ

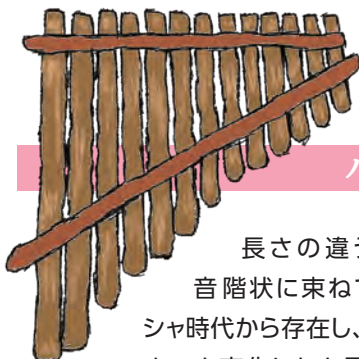
イタリア語で「小さなガチョウ」という意味。陶器製のものが主流だがプラスチック製のものもある。

その前身である楽器は古代中国、紀元前メソポタミア、南米、日本などの各地で発見されている。現在広く普及しているオカリナは19世紀にイタリアでジョゼッペ・ドナーティが、それまであった土笛に初めて西洋音階を導入したものが始まりと言われている。



ウドウ・ドラム

もともとナイジェリアのイボ族の間で、宗教儀式で使われていた陶器製の壺のような楽器。側面に穴があいていて、穴をふさぐ様に叩いたり、胴そのものを叩いたりしながらリズムを作る。



パンパイプ

長さの違う葦の茎や竹のパイプを音階状に束ねて作った管楽器。古代ギリシャ時代から存在し、後にパイプオルガンやハーモニカへと変化したと言われている。一方、パイプ

自体はヨーロッパ諸国で忘れ去られたが、ルーマニアでは「ナイ」の名前で伝承され、民族音楽だけでなくクラシック、ジャズなど世界の様々なジャンルで活躍している。またシルクロードを通して中国までたどり着き、そこでは排簫はいしょうという独自の進化を遂げた。日本にも奈良時代に伝わったが定着しなかった。モーツァルトのオペラ「魔笛」の中でパパゲーノが手にしている笛はこのパンパイプである。

木魚って
楽器なの
かの一？



ビリンバウ

カポエイラに使われるブラジルの民族楽器。鉄弦、木製の弓そして共鳴体としてのひょうたんから出来ている。カポエイラは踊りであると同時に格闘技でもある。これにビリンバウという音楽的要素が加わり、2014年にユネスコによって無形文化遺産に登録された。



ディジュリドゥ

オーストラリア先住民アボリジニに伝わる楽器で、数万年前から存在する世界最古の管楽器と言われる。木製だがトロンボーンやチューバなどと同じ発音原理を持つことから金管楽器に分類される。シロアリに食べられて中が空洞になったユーカリの木を使った楽器で、唇を振動させて音を出す。

木魚あれこれ

山田和孝
東京都八王子市
臨済宗南禅寺派 寶勝寺 住職



木魚と聞いて皆様が思い浮かべるのは、お坊さんがお経に合わせてポクポクと鳴らしている木製の鈴のような丸型の鳴らしものだと思います。木の魚、と書く割にはガイコツか仮面ライダーのようで全然サカナには見えません。

最古の木魚の記録は中国元王朝の時代にまで遡ります。この頃の木魚は本当に細長い魚の形をしておりました。ただ使い方が異なっておりまして、寺の軒下に吊るし、食事や行事の折に人を集める合図を送る鳴らしものでした。

いやいや、肉や魚といった生臭ものはお寺では固い御法度のはず。なのになんでわざわざ魚の形にするのかと思われるかもしれませんが。これには諸説あり、『勅修百丈清規』(1342)によりますと、『魚は眠らないので、その姿を木に彫って打つことにより惰眠をむさぼる事のないよう修行者への戒めとする』とあります。また「増修教苑清規」(1347)には『不熱心な小坊主が生前の行いの報いを受けて畜生道に落ち、魚として生まれ変わった。師匠の供養で成仏できたが、その際境内に一本の木が生えた。師匠はその木で魚の形を刻み、時刻を告げる鳴らしものとした』という言い伝えが載っています。

日本では室町時代にはすでに中国から木魚が伝わっており、山梨県山梨市の雲光寺には応永4年(1394)の銘が入った丸型木魚が現存していますが、大々的に使われるようになったのは江戸時代からです。禅宗の一派である黄檗宗隠元禅師が丸型木魚に合わせての読経を日本にもたらしました。ちなみにこの隠元禅師、インゲン豆をもたらした事でも有名です。

しかし、この木魚による読経は当時の僧侶たちからはどうもウケが悪かったようです。隠元とかいう外タレが持ち込んだハイカラなやりかたは古風を重んじるウチの宗門では受け入れられない、と天台宗の偉いお坊さんがガチ切れした文献が残っています。(「続山家学則」)今の感覚ですと、お経をロックのリズムに乗せて唱えるぐらいのインパクトがあったのかもしれない。

とはいえ偉い人が怒っても、大衆にウケれば定着していくのはいつの世も同じ、江戸時代の後期には各派大本山でも正式な法式として木魚による読経が受け入れられています。

以来木魚とお経は切っても切れない間柄、お寺と言えば木魚の音を思い出す方も多いのではないのでしょうか。

本来の形や意味合いは今では薄らいでしまっているかもしれませんが、御仏のお導きがこの世にあまねく行き渡りますようにと、今日も全国の仏教寺院ではポクポクと木魚が打ち鳴らされています。

珍楽器紹介

スティールパン

カリブの島国トリニダード・トバゴで開発され、20世紀最後のアコースティック楽器とも言われる。この国はもともとサトウキビ栽培を中心とした農業国であった。19世紀末に石油資源が発見されて以降は石油産業中心へと移り変わった。そして国中に溢れかえった石油のドラム缶から生まれたのがスティールパンである。輪切りにしたドラム缶の一方の平面に凹凸をつけ、缶の長さによって音の高さを変える。世界三大カーニバル(リオ、ヴェネツィア、トリニダード)のひとつで、首都ポートオブスペインで毎年開催されるトリニダードカーニバルでも欠かせない楽器である。



シタール

ガンジス川流域を中心とした北インド発祥で、アフガニスタンやシルクロードの楽器から影響を受け、14世紀頃に生まれたと言われ、インド音楽の代名詞とも称される。18世紀にはインド宮廷音楽にも登場する。共鳴胴はひょうたんやユウガオの実を乾燥させたもので作られる。その神秘的な音色は、全ての人の心に安らぎを与え、エキゾチックで不思議な感覚にしてくれる。伝統的なインド音楽やインドポップスに使用される他、60年代にはビートルズのジョージ・ハリスンが、またその後ローリング・ストーンズなどが好んで使用したことで知られる。



何でも楽器!

パーヴェル・カルマノフ

作曲家 ロシア国立モスクワ音楽院卒業



皆さん、こんにちは。最初に言わせて下さい。私はここで日本の音楽ファンの皆様に向けたメッセージを送ることが出来てとても幸せです! 何故かわかりますか? 私は、本や映画やインターネットでしか見たことが無いのですが、日本の文化、自然が大好きです。いつの日か日本を訪れて、皆様に私の作品を届けたいという夢が実現することを願っています。

さて、私はロシアの作曲家です。5歳の時に作曲を始めこれまでに多くの作品を生み出しました。モスクワ音楽院時代には、私は音だけでは満足できず、もっと総合的な創作をしたいと考え、友人たちと切磋琢磨しながら勉強しました。音だけでなく、映像、光、ダンス等色々なものを扱いました。私は作品を通じて人間の持つ多くの感覚にうたえます。学生時代、クラシック音楽以外の様々な分野の音楽にも興味を持ちました。ジャズ、ロック、更に過激な音楽も聴きました。全ての音楽は美しく価値あるものです。

ところで、世界中に沢山のユニークな楽器があります。私は自分の作品の中でもそういった楽器を積極的に取り入れてきました。しかし、時にはより新しい音が必要になります。こうなった時、私にとっては何でも楽器になります。ビールやウォッカの瓶、更にはビールやウォッカ自体も楽器になり得ます。私は、常に新しい音を探し続けているのです。

ミュージカルソー

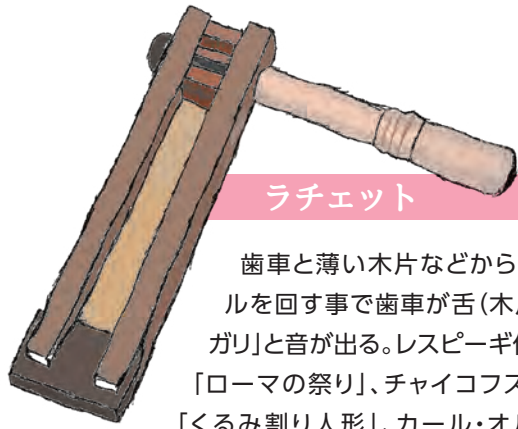
西洋のこぎりをヴァイオリンの弓で擦ったり、ハンマーで叩いたりして演奏する。もちろん楽器として使われる場合は刃のついてないものが使用される。のこぎりの柄の部分で両膝で挟み左手でのこぎりの先端を持って曲げ加減によって音程をとる。奏でられる音は女性の声や胡弓のものに似ている。日本へは明治時代に伝来したと言われている。過去にはアメリカで開催されたミュージカルソー・フェスティバルにおいて日本人が優勝するなど国内でも愛好家が多い。また、「関西のこぎりオーケストラ」という珍しいオーケストラがあり国内外で活躍している。横山ホットブラザーズの「お前はアホか〜」ネタでもミュージカルソーが使われた。



YouTube



カタリーナ・ミカダ



ラチェット

歯車と薄い木片などからなる楽器。ハンドルを回す事で歯車が舌(木片)をはじき「ガリガリ」と音が出る。レスピーギ作曲「ローマの松」「ローマの祭り」、チャイコフスキー作曲バレエ「くるみ割り人形」、カール・オルフ作曲「カルミナ・プラーナ」などで使われる。オーケストラでは一般的に打楽器奏者が担当する。尚、国民的バラエティ番組である「笑点」のテーマ曲でも使用されている。

レイン・スティック

乾燥させた筒状のサボテンの中にたくさんの小石などを入れたもの。サボテン内側の多数のとげに小石が当たって雨の擬音が鳴る仕組み。起源はアフリカでその後中南米へ渡り、雨乞いの儀式などに使われた。自然素材が作り出すとてもやさしい音で、ヒーリング



ミュージック等にもよく利用される。

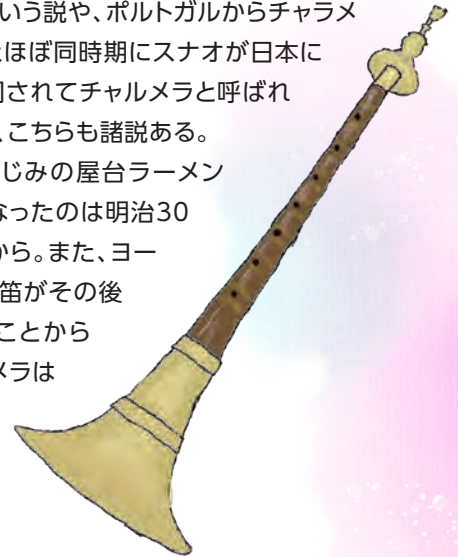
読者の皆さんは楽しんでくれたかの？ 本誌を読んだ感想や、今後こんな内容を取り上げて欲しい等の意見があれば、是非教えて欲しいものじゃ！皆さんと共に楽しいパンフレットが作ればワシも嬉しいんじゃ！ワシへの連絡は hakase@imea.or.jp へメールを送ってくればいいんじゃぞ！



チャルメラ

発祥については諸説あるが、元をたどれば古代ギリシャの葦笛に通じる。葦笛は様々な国に伝わり各地で独自の進化を遂げた。トルコのズルナ、インドのシャハナイ、中国のスナオ等がこれにあたる。日本には安土桃山時代に伝わったと言われている。尚、中国から伝わったスナオが日本化し、それを見たポルトガル人がチャメラと呼んだことからチャルメラになったという説や、ポルトガルからチャメラが伝わったのとほぼ同時期にスナオが日本に伝わったため混同されてチャルメラと呼ばれるようになった等、こちらも諸説ある。

ちなみに、おなじみの屋台ラーメンで使われるようになったのは明治30年代後半あたりから。また、ヨーロッパに渡った葦笛がその後オーボエに進化したことから考えると、チャルメラはオーボエの親戚と言える。



世界にはたくさん珍しい楽器があることをわかってくれたかの？パンフレットで伝えきれなかった音と演奏をできるだけ紹介しようと思ったんじゃ。小さい子はパパやママと一緒に観るんじゃぞ！

これからも新しい楽器の動画をどんどん増やしていく予定じゃ。くれぐれも **チャンネル登録** を忘れるんじゃないぞ！

様々な珍楽器の動画を

YouTube で公開中!

日露交歓コンサート公式



個人賛助会員のごあんない

気軽に一流のクラシック音楽に触れる機会を、日本の隅々にまで提供することを目的に、当協会では1992年から2020年までの29年間で、北海道から沖縄県に至るまで47全都道府県132市区町村において364回のコンサートを開催して参りました(2020年は社会情勢を鑑み全公演中止)。全てのコンサートは、日本政府関係各省庁や開催各地の地方公共団体をはじめ、各種団体、民間企業のご支援等により、入場無料(一部低価格な入場料による公演を含む)として開催することができました。コンサートに参加された

国民の皆様からは、「とても良いコンサートであった」と高い評価を頂いております。また、当協会は平成26年10月に公益社団法人の認定を受け、より活発な活動を目指しているところです。公益法人制度改革を経て、より一層の法人自立が求められている中、この素晴らしい事業の永遠の存続と更なる発展を期して、一人でも多くの国民の皆様方に、個人賛助会員へのご入会を通じて、当協会の活動をご支援頂きたくお願い申し上げます。

【個人賛助会員に関する詳しいお報せはコチラ】 ⇨ <http://www.imea.or.jp/web/support>

クラシックって楽しいな！

(珍楽器にまつわるエトセトラ)

制作：公益社団法人国際音楽交流協会
大阪ガス株式会社
株式会社大原の里
影近設備工業株式会社
ダイキン工業株式会社
本願寺
井村屋グループ株式会社

助成：一般財団法人日本宝くじ協会

協力：株式会社コスモ・アーツアンドテクニクス

挿絵：指宿京

発行：2020年11月